令和６年度　国立中央青少年交流の家　教育事業

富士のさと　イングリッシュキャンプ

令和６年９月 14 日（土）～９月 16 日（月・祝）２泊３日

○目的

米軍海兵隊員との交流や英語での体験活動を通して、どのようにしたら英語でのコミュニケーションがうまくいくかを考え、実行していく。その中で失敗体験や成功体験を重ねながら外国との文化の違いを知ることをきっかけに、英語や異文化を好きになっていくことを目指す。

○参加者

小学５年生から中学２年生の児童・生徒　41 名

（小学５年生：男子６名、女子 10 名　小学６年生：男子８名、女子５名
中学１年生：男子１名、女子３名　中学２年生：男子３名、女子５名）

○本事業の特徴

・在日米軍海兵隊キャンプ富士諸職種共同訓練センター(以下、「キャンプ富士」という。)と連携し、３日間を通して海兵隊員とともに活動する。
・生活に関わるプログラムでは固定班「Family 班」で行動し、野外炊事等の活動プログラムでは、プログラムごとにメンバーが変わる「Challenge 班」で行動する。

○事業の内容（Family 班で実施…青字　Challenge 班で実施…緑字　それ以外(個人作業等)…黒字）

・１日目

（１）アイスブレイク（交流ゲーム）

全員で簡単なゲームに挑戦し、緊張をほぐした。また、海兵隊員が企画したゲームでは英単語の文字数に着目したゲームに挑戦し、海兵隊員とともに考えることで海兵隊員との距離が縮まった。

（２）テント設営

海兵隊員や「Family 班」の班員と協力して、自分たちが寝るテントの設営を行った。「テント設営で使える英単語」の表を事前に参加者に渡したことで、海兵隊員へ何をしてほしいかを伝えている様子がうかがえた。

（３）野外炊事

タコスとタコライス作りを行った。初めて会うメンバーもいる中で、役割分担や調理工程についてコミュニケーションをとって進めることができた。また、南米出身の海兵隊員から本場のタコスについて聞く機会となるなど、異文化を知る場ともなった。

（４）入国審査

２日目にキャンプ富士を訪問する際の会話について、「入構手続き」「食事の注文」「キャンプ富士スタッフとの挨拶」の３つのシチュエーションに分けて練習を行った。海兵隊員に審査員として協力いただいて練習する中で、できなかったことができるようになるなど、キャンプ富士の訪問に向けて自信をつけている様子がうかがえた。

・２日目

（１）キャンプ富士訪問

キャンプ富士内の見学を行った。最初に憲兵隊、消防署、飛行場といったキャンプ富士で働いている人たちの現場を見学した。その後、レストランでの食事(注文)体験や、体育館・図書館での海兵隊員との交流を通して、異文化体験を行うことができた。

（２）キャンプファイヤー

海兵隊員を交えた小グループをこまめに作り変え、レクリエーションを行った。また、「マイム・マイム」や海兵隊員が企画したダンスで交流を深め、最後に「カントリーロード」を合唱して思い出を振り返った。

・３日目

（１）イングリッシュクイズラリー

交流の家の各所をめぐり、チェックポイントで出される問題に英語で答えるウォークラリーに挑戦した。海兵隊員に物の名称や表現方法について質問しながら活動を進めることができた。

（２）メモリータイム(最終発表とそれに向けた準備)

３日間の思い出を英語で表現することに挑戦した。自分の感情表現について簡単な英語の定型文を用意し、そこに当てはめる形で作文した。中には海兵隊員に英文を確認してもらい、ジェスチャーなどを用いながら本当に自分が伝えたいことを一緒に考える参加者もいた。作文後にはペアを交代しながら繰り返し発表し合い、最終発表に向けての準備と最後の交流を楽しんだ。最終発表では、一人ずつ考えた文章を全員の前で発表した。全員が自分の話したいこと、伝えたいことを堂々と発表することができ、自信をつけた様子がうかがえた。

☆参加者の声（事後アンケートより）

〇英語への抵抗感がだいぶ少なくなった。言葉の壁があっても、外国人とコミュニケーションをとる楽しさを知ることができた。

〇会話が単語とジェスチャーだけで成立した。国の違いはそれほど大きな問題ではないことに気づいたため、海外の方ともっと話してみようかなと思うことができた。

〇キャンプ富士を訪問したときに金属探知機や防犯用の盾などを実際に触れさせてもらい、普段の生活の中ではできない体験ができたことにとても興奮した。マリーンの人はみんなサービス精神が旺盛で、とてもフレンドリーだった。

〇友達がいっぱいでき、離れるのが寂しかった。最初は自分からは話しかけることができなかったが、仲良くなったことで自分から話しかけることができるようになった。

〇野外炊事で、みんなで力を合わせて完成させたことが印象に残った。キャンプ以降、英語に対する意欲や自信を持てるようになった。

〇英語は苦手で全然出来なかった上に、必要ないと思っていたが、今回マリーンと遊んだり会話したりした事で、英語が話せた方が将来の自分のためになると思えた。

●中学生には内容がやや幼く感じた。

●英語の勉強が少し大変だった(小学５年生)

☆アンケート結果の考察

・「外国の人との交流をしてみたいと思いますか？」という項目について向上傾向が見られた。事前アンケートにて「あまり思わない」「全く思わない」と回答していた参加者のほとんどが、言語が通じないことが心配と回答していたが、事後アンケートでは言葉が伝わらなくてもコミュニケーションが取れることに気づいたという回答が多く見られた。このことから、言語だけではないコミュニケーションについて、体験を通して知ったことが向上のきっかけになったと考えられる。

・「もっと英語を学んでみたいと思いますか？」という項目について向上傾向が見られた。事前アンケートでは苦手であるためにそう思わないという回答が散見されたが、事後アンケートでは外国語を覚えてもっといろいろな人と話してみたいという感想が多くあり、海兵隊員との体験が英語学習の動機付けとなった参加者が多く見られた。

・英語や外国語(外国文化)に関心の高い参加者が多く集まった中で、実践的な英会話が困難であったという感想が多く見られた。一方で外国文化や海兵隊員(外国人)の性格面に関する気づきや感想が多かったことから、海外留学体験に近い気づきや学びを提供することができたと考えられる。

☆成果・課題

〇多くの人とコミュニケーションをとっていくことを一つの目標にしたうえで、円滑な事業運営とのバランスを鑑みて「Family 班」「Challenge 班」という２つの集団での進行を試みた。「Challenge 班」で多くの人との関わりが持てたことはもちろんのこと、「Family 班」では集団での仲間意識が生まれたことで、班員同士(海兵隊員も含む)でより深く関わろうとする様子がうかがえた。

〇キャンプ富士への訪問に向けて「入国審査」として練習を行ったことで、入構手続きやキャンプ富士でのコミュニケーションを円滑に行うことができた。また、海兵隊員に審査をしていただいたことで、実践的なヒアリングや発音について体験的に学ぶことができ、本事業の基盤となる活動になった。

●活動プログラムによって終了時刻を超えてしまうものや、多く時間を残して終了してしまう等想定が外れる部分があった。各活動プログラムの時間設定や移動する距離(活動場所)、内容について再検討する必要がある。

●対象年齢を広げて事業を実施したが、英語の習熟状況に多少の差があり、特に作文の場面で進行に差が出ている様子が見られた。作文から最終発表までのプログラム構成について、ゲーム性を強くするなど、難易度と動機づけのバランスを考慮した工夫が必要である。

〇事業の様子（写真）

＜１日目＞

アイスブレイク

テント設営

野外炊事

入国審査

＜２日目＞

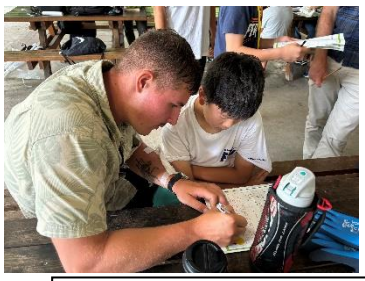
キャンプ富士訪問

キャンプ富士訪問

キャンプファイヤー

＜３日目＞

イングリッシュ
クイズラリー



メモリータイム